

# ダニエル書 - 第四百二十二番

## 獣の像の形成：明かされた予言的旅路

Jeff Pippenger

2024-03-17

神の民が封印される前に通らなければならない大いなる試練は、獣の像の形成である。その形成は、2001年9月11日からアメリカ合衆国における日曜法に至るまでの間に起こる。その予言的期間は、十四万四千人の封印の時を表し、また、すべての聖書の幻が完全に成就する時期をも示している。その期間に、真のプロテスタントの角は清められ、永遠にキリストの御姿を映すようになる。なぜなら、キリストはプロテスタントであるからだ。

「キリストはプロテスタントであった。彼は、自分たちに対する神の御旨を退けたユダヤ民族の形式的な礼拝に抗議された。彼は、彼らが人間の戒めを教義として教え、見せかけの者であり偽善者であると言われた。白く塗られた墓のように、彼らは外見は美しいが、内側は汚れと腐敗に満ちていた。改革者たちの起源はキリストと使徒たちにさかのぼる。彼らは形と儀式の宗教から出て、そこから分離した。ルターとその追隨者たちが改革された信仰を作り出したのではない。彼らは、それをキリストと使徒たちによって示されたとおりに、ただ受け入れただけである。聖書は私たちに十分な指針として与えられている。しかし、教皇とその働き人たちは、それが彼らの見せかけを暴き、彼らの偶像礼拝を戒めるがゆえに、まるで呪いであるかのようにそれを入々から取り上げる。」レビュー・アンド・ヘラルド、1886年6月1日。

封印の時に、プロテスタントの角は清められ、浄化される。同じ時期に、背教した共和党の角が背教したプロテスタントたちと結びつき、こうして教会と国家の結合から成る権力の角を形成する。そのとき地の獣の二本の角は、獣の像とキリストの像となる。背教の角は、腐敗した教会と腐敗した国家との二重の関係であり、義の角は、神性と人性との二重の関係である。

その後、獣の像が世界に形づくられるが、それは、地の獣の背教的プロテスタント主義を十の頭の筆頭として受け入れた、国家（国際連合）に代表される二重の獣である。その獣の上に、淫婦たちの母である女がいて、十人の王を持つ獣を支配している。彼女が乗る獣は教会と国家の結合で、ヘロデがヘロデヤの娘サロメと結んだ近親相姦的な霊的姦淫によって象徴されている。そして、その女が支配する獣と女との関係もまた、教会と国家の結合であり、国際連合を表す世界的な獣を構成する諸王たちとローマの淫婦との不法な関係によって表される。世界全体に強制される獣の像においては、すべての国が巻き込まれ、墮落したあらゆる権力が結集する。

黙示録17章13-14節を引用。「彼らは一つの思いを持っている。」普遍的な結束、一つの大いなる調和、サタンの勢力の連合が生じるであろう。「そして彼らは自分たちの権力と力を獣に与えるであろう。」このようにして、宗教の自由、すなわち良心の命ずるところに従って神を礼拝する自由に敵対する、同じ恣意的で圧制的な権力が現れるのである。これは、過去において、ローマ教皇制が、ローマ主義の宗教儀礼と典礼に同調することを敢えて拒んだ者たちを迫害したときに示したものと同じである。

終わりの日に行われる戦いにおいては、神の民に敵対して、ヤハウエの律法への忠誠から離反したすべての墮落した勢力が結集するであろう。この戦いでは、第四の戒めにある安息日が大きな争点となる。というのも、安息日の戒めにおいて、大いなる立法者はご自身を天と地の創造主として明らかにしておられるからである。セブンスター・アドベンチスト聖書注解 第8巻、983。

世界的な獣の像に関わる反逆が「普遍的」であり、「ヤハウエの律法への忠誠から背教したあらゆる腐敗した勢力」を表しているという事実は、アメリカ合衆国内における獣の像の形成が、背教したあらゆる腐敗した勢力の統合を意味することを示している。アメリカ合衆国のプロテスタントは1844年に第一の天使のメッセージを拒絶したとき背教し、ラオデキア的アドベンチズムは1863年に背教した。背教したプロテスタンティズムとラオデキア的アドベンチズムは、偽預言者によって自らの王国の半分を放棄するよう誘惑されている、共和主義という角の内部の政治勢力と「結合の絆」を結ぶだろう。

獣の世界的な像において、全地を惑わすのは偽預言者である。アメリカ合衆国内の獣の像においても、聖ならざるが統一された「サタンの勢力の同盟」を生み出す者は、やはり「偽預言者」でなければならない。獣の世界的な像は二重であるが、同時に三者連合でもある。竜・獣・偽預言者から成るその三者連合が、世界をハルマゲドンへと導く。まずアメリカ合衆国内で形成される獣の像においては、三者連合が存在しなければならず、しかもそれは二重性を持つ獣でもある。獣の二つの像において、その二重の性格とは教会と国家の結合であり、その関係を主導するのは教会である。

三重の連合は二つの獣の像のいずれにも表されなければならないが、黙示録には竜と獣と偽預言者の二つの顕現がある。獣の世界的な像の三重構造は、心靈主義（竜）、カトリック（獣）、背教的プロテスタント主義（偽預言者）によって表されている。これら三者には、宗教的要素（心靈主義、カトリック、背教的プロテスタント主義）だけでなく、政治的要素もある。竜（多様な形態の社会主義）、獣（君主制）、偽預言者（共和制として始まり、民主制で終わる）。

アメリカ合衆国で結集する三者連合は、偽預言者によって（欺かれて）強制的に結合させられるが、それは全世界的な獣の像の場合と同様である。黙示録には、底知れぬ淵から上ってくる三つの背教的勢力によって示される、もう一つの三者連合がある。第十七章ではカトリックが底知れぬ淵から上ってくるとされ、そしてそれは、底知れぬ淵からの三者連合における獣である。

あなたが見た獣は、かつてはいて、今はいない。やがて底なしの淵から上って来て、滅びに至る。地に住む者たちのうち、世の始めからその名がいのちの書に記されていない者たちは、かつてはいて、今はいないが、それでもなおいるその獣を見たとき、驚嘆する。黙示録 17:8

無神論という竜の力は、第十一章で底知れぬ淵から現れる。

そして、彼らはその証しを終えたとき、底知れぬ淵から上ってくる獣が彼らに戦いを挑み、彼らに打ち勝って、彼らを殺す。ヨハネの黙示録 11章7節

イスラム教の偽預言者は第九章で底なしの穴から現れる。

そして、第五の天使がラッパを吹いた。私は、一つの星が天から地に落ちるのを見た。彼には底なしの淵の鍵が与えられた。彼がその底なしの淵を開くと、そこから大きな炉の煙のような煙が立ちのぼり、その淵の煙のために太陽も空気も暗くなった。そして、その煙の中からいなごが地上に出てきた。彼らには、地のサソリが持つような力が与えられた。黙示録 9:1-3.

天から落ちて底なしの淵を開いた星は偽預言者ムハンマドであり、彼がその淵を開いたとき、「いなご」として表されたイスラムの戦士たちを、終末時代の預言的叙述の中に登場させた。底なしの淵の三者連合は、竜（無神論）、獣（カトリック）、偽預言者（イスラム）から成る。全世界的な獣の像においては、偽預言者は背教的プロテスタント主義である。その偽預言者は、サロメの誘惑的な踊り、あるいはカルメル山でのバアルの預言者たちの踊りによって、全世界を欺く。黙示録13章では、偽預言者は獣の前で行う奇跡によって世界を欺く。そうした欺きの象徴表現は、経済的強要と軍事的威力を表している。

彼は大いなる奇跡を行い、人々の目の前で天から地上に火を降らせる。また、獣の前で行う力を与えられていたそれらの奇跡によって地に住む者たちを惑わし、剣の傷を受けてなお生きたその獣のために像を造るよう地に住む者たちに言う。さらに彼には、獣の像に命を与える力が与えられていて、獣の像が物を言い、また獣の像を拝もうとしない者は皆殺されるようにする。彼はまた、小さい者も大きい者も、富む者も貧しい者も、自由な者も奴隷も皆、右の手か額に刻印を受けるようにさせる。そして、その刻印、すなわち獣の名、またはその名の数を持っていない者は、だれも買うことも売ることもできないようにする。ヨハネの黙示録 13:13-17

偽預言者に結び付けられている欺きや奇跡は、実際には、経済（だれも売買できない）と軍事力（殺される）によってもたらされる強制力を表している。聖書におけるイスラムの偽預言者は、イスラムが諸国を怒らせ、苦悩させる働きを表している。彼らは戦争によって人々を怒らせ、苦しめるといふ働きを行い、聖書はその戦争がやがて経済的破局を生み出すことを指摘している。イスラムの戦争とそれに続く経済的余波こそが、アメリカ合衆国において「エホバの律法への忠誠から背教したあらゆる腐敗した権力」を結集させる問題である。

十字架において、サドカイ人とパリサイ人は、真のプロテスタントの角を十字架につけるために結束したとき、「エホバの律法への忠誠から完全に背教した」。彼らはキリストを退け、偽のキリストを象徴するバラバを選んだ。「Bar」は「息子」を意味し、「Abba」は「父」を意味する。バラバは「父の子」を意味する。キリストはすべての預言者の中で最も偉大であり、バラバは偽預言者の象徴であった。

十四万四千人の封印の時に、地の獣の二本の角は、その最終的な預言的顕現の段階に至る。一方はキリストの像を、もう一方は獣の像を表す。この二本の角が顕現する歴史において、背教したプロテスタントは、2001年の米国愛国者法をもって、間もなく到来する日曜法へと向かう歩みを開始した。その道標は独立宣言と符合している。独立宣言はその始まりにおいて子羊のように語った。というのも、それは王権と教皇支配に対するプロテスタントの抗議を表明していたからである。その終わりにおいて対応する道標（愛国者法）は、プロテスタントの抑圧を表している。

封印の時にける二つの角の旅路の第二の道標は、当初は、地の獣の力である二つの権力の分立を成文化した憲法によって示されていた。終わりには、その道標に対応するものとして、2021年1月6日の公聴会という「カンガルー裁判」があり、そこでは憲法の基本的特権が政治的便宜のために棚上げされた。

二つの角の終わりに向かう旅路における最後の道しるべは、間もなく制定される日曜法であり、その始まりは外国人・治安法によって予表されていた。したがって、初期の歴史における三つの道しるべは、小羊（1776年）によって表される、真に自由であるための唯一の道でもある独立と自由から、竜（1798年）による隷属へと移行することを示した。

封印の時の三つの道標は、偽預言者である地の獣の最後の旅路を指し示している。その旅路は、旗印が掲げられ、そのとき多くの者が「さあ、主の山に登り、ヤコブの神の家へ行こう。主はその道を私たちに教え、私たちはその道を歩もう。シオンから律法が出、エルサレムから主の言葉が出るからだ」と言うとき、エルサレムで終わる。

地の獣の最後の三段階の旅路は、偽預言者がエルサレムへ向かう旅である。真の預言者が来てエルサレムに入ったとき、彼はろばに乗って入った。地の獣もまた「ろば」に乗ってエルサレムに入る。偽預言者（地の獣）として、彼はバラムによって表されているからである。バラムは名誉と富を求めるあまり、真の預言者となる召しから離れ、「エホバの律法への忠誠から背教した」。そして彼は、間もなく到来する日曜法においてアメリカ合衆国がするのと同じように、神の民を呪うことに加担する決心をした。

バラムはろばに乗って旅をした。旅の途中、バラムのろばがバラムを困らせたのは三度あった。最初は、そのろばが道をそれた。

すると、雌ろばは、主の御使いが道に立ち、その手に抜き身の剣を持っているのを見たので、道をそれて畑に入った。そこでバラムは雌ろばを打って、道に戻らせようとした。民数記22:23

2001年9月11日、第三の災いであるイスラム、すなわち聖書の預言におけるアラブの野ろばが、バラムを道から外れさせた。ニューヨーク市の巨大な建物が崩れ落ちたとき、それは諸国と教会の歴史における「転換点」となったからである。道に立ちただかっていた天使は、その栄光によって地を照らすためにそのとき降りてきた力ある天使であった。そのろばは再びバラムに苦しみを与えることになるのだった。

しかし、主の使いはぶどう畑の間の道に立っていた。道のこちら側にもあちら側にも石垣があった。ろばが主の使いを見ると、石垣に身を寄せ、バラムの足を石垣に押しつぶしたので、彼は再びろばを打った。民数記 22:24、25

2001年9月11日以降、神の民は（イザヤ書27章の）ぶどう畑の歌のメッセージを歌うことになっていたが、それは現在、バラムがいる場所、すなわちこちら側にもあちら側にも「壁」がある場所である。アメリカ合衆国南部国境の壁は、第三にして最後の道標における「政教分離の壁」の崩壊に先立つ争点である。南部国境の「壁」をめぐる問題は、移民をめぐる内部の争いが南北戦争の再来に先んじて地の獣を二つの対立する陣営へと分断し始める中で、バラムの「足」が押しつぶされる地点である。

二つの壁の間の歴史とは、1789年から1798年にかけての憲法の道しるべによって示される歴史であり、その道しるべは、トランプが「壁を建設する」ことを強調して大統領選への出馬を表明した2015年の歴史を象徴し、間もなく到来する日曜法が政教分離の壁を取り払うまで続く。

2001年9月11日以降、バラムによって象徴される地の獣は分裂し始めた。バラムの二つの壁の分裂は、地の獣の両角の内部における二つの階級の分離を表しており、それは2016年のトランプの当選、2020年の二人の証人の死、2021年1月6日のペロシの裁判、2023年の二人の証人の復活、そして2023年10月7日にろばがバラムを不具にしたことによって示されている。

バラムの旅路の最後の道しるべは、ろばが「語る」時であり、それは間もなく訪れる日曜法の時である。そこではアメリカ合衆国が竜のように語り、黙示録18章の天使が再び語り、遅れていたハバククの幻が語る。遅れていたその幻とは、イスラムに関する第三の災いの幻であり、間もなく訪れる日曜法において、野ろばのようにその荒々しい行動によって語る。

そして主の使いはさらに進み、右にも左にも身をよける余地のない狭い場所に立った。ろばが主の使いを見たとき、ろばはバラムを乗せたまま倒れ込んだ。するとバラムの怒りが燃え上がり、彼は杖でろばを打った。主はろばの口を開かれ、ろばはバラムに言った。「私はあなたに何をしたというのですか。あなたはなぜこの三度、私を打ったのですか。」バラムはろばに言った。「お前が私をあざけたからだ。今、私の手に剣があれば、お前を殺しているところだ。」ろばはバラムに言った。「私はあなたのろばで、私があるあなたのもとなって以来、今日までずっとあなたが乗ってきたろばではありませんか。私がこれまであなたに対してこのようなことをしたことがありましたか。」彼は「ない」と言った。そのとき主はバラムの目を開かれ、彼は主の使いが道に立ち、手に抜き身の剣を持っているのを見た。彼は頭を下げ、顔を地につけてひれ伏した。民数記 22:26-31。

アメリカ合衆国は、世界を欺いて獣の世界的な像を打ち立てる偽預言者である。アメリカ合衆国内で獣の像が形成される時期にあつては、アメリカ合衆国は、バラムの雌ろばで象徴される偽預言者に運ばれている。十四万四千人の封印の時に、アメリカ合衆国内のあらゆる腐敗した権力を教会と国家の関係へと結集させる偽預言者は、第三の災いのイスラムである。

それは戦争と、その戦争によってもたらされる経済崩壊を通してその働きを成し遂げる。これら二つは、米国の偽預言者が、底なしの淵の偽預言者によって米国でなされた働きを繰り返すときに、全世界を従わせるために用いるのと同じ力である。

アメリカ合衆国はいま、1798年の外国人・治安諸法の中心にあつた「壁（移民）」の問題と、間もなく到来する日曜法によって完全に取り払われる政教分離の「壁」との板挟みになっている。アメリカ合衆国はすでに財政的に行き詰まっており、国家債務は手の施しようがない。竜の力が現在、偽りの金融見通しを支えているが、印刷機を回せば富が生み出されるという主張は嘘である。結局のところ、竜は聖書の預言における嘘つきなのだから。彼はヒトラーの有名な宣伝機構の現代版を通じてその嘘を広め、それによって外国

人・治安諸法の第四の要素が繰り返されるための論理を提供している。すなわち、それは大統領に、自らの考えに反対するいかなる報道機関も停止させる権限を与えるものだった。

イエスは常に、物事の終わりをその始まりによって示す。アメリカ合衆国における獣の像は、世界的な獣の像と同じ預言的特質を備えていなければならない、実際にそうである。しかし、地から上る獣の偽預言者の中で墮落した同盟を生み出している欺きは、イスラムの偽預言者である。バラムも、ろばも、偽預言者の象徴である。十四万四千の封印の歴史は、底知れぬ淵の三つの勢力の歴史である。底知れぬ淵から出たイスラムは、2001年9月11日の第一の道標となる。底知れぬ淵の無神論は2020年に二人の証人を殺すために台頭し、底知れぬ淵のカトリックは間もなく到来する日曜法において、その死からよみがえる。次回の記事でこの研究を続けます。

世界は良くなってはいない。悪人や人を惑わす者たちは、ますます悪くなり、人を欺き、また自らも欺かれるようになる。唯一のまことの神の具現であり、善と憐れみと尽きることのない愛に満ち、常に人間の悲哀に心を動かしておられた神の御子を退け、その代わりに人殺しを選ぶことによって、ユダヤ人は、神の御霊の抑制する力が取り去られ、人が背教者の支配下に置かれるとき、人間の本性が何をなし得、また何をなすようになるかを示した。支配者としてサタンを選ぶ者は、自らが選んだ主人の霊を現すことになる。

神がその不義を罰するためにご自分の居所から出て来られるまで、世界は良くならない。そのとき、大地は流された血を明るみに出し、殺された者たちをもはや覆い隠さない。キリストは弟子たちに警告して言われた。「誰にも惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名乗って『わたしはキリストだ』と言い、多くの人を惑わす者が大勢現れるからである。あなたがたは戦争と戦争のうわさを聞くことになるだろうが、慌てないようにしなさい。これらは必ず起こるが、まだ終わりではない。民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々で飢饉や疫病や地震が起こる。これらはすべて産みの苦しみの初めである。そのとき、人々はあなたがたを引き渡して苦しみ、殺すであろう。あなたがたはわたしの名のゆえに、すべての国民に憎まれるであろう。そのとき多くの者がつまずき、互いに裏切り、互いに憎み合うようになる。多くの偽預言者が起こり、多くの人を惑わす。不法がはびこるので、多くの人々の愛は冷え込む。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。」

キリストがこの地上におられたとき、この世はバラバを選んだ。そして今日も、この世も教会も同じ選択をしている。キリストに対する裏切り、拒絶、そして十字架刑の光景は再現されてきており、今後もさらに巨大な規模で再現されるだろう。人々は敵の性質に満たされ、それに伴いその惑わしが大いなる力を持つようになる。光が拒まれる度合いに応じて、思い違いと誤解が生じる。キリストを退けてバラバを選ぶ者は、破滅的な欺きのもとで行動している。曲解と偽証はやがて公然たる反逆へとふくれあがる。目が悪ければ、全身は暗闇に満ちる。キリスト以外のいかなる指導者に愛着を注ぐ者も、身体・魂・霊のすべてにおいて、あまりにも魅了する迷妄の支配下に置かれ、その力のもとで魂は真理を聞くことから背を向けて偽りを信じるようになる。彼らは罠にかけられ捕らえられ、その一つ一つの行いによって、「バラバを釈放せよ、

しかしキリストは十字架につけよ」と叫んでいる。

今なお、この決定は下され続けている。十字架で行われた光景が、今また繰り返されている。真理と義から離れた教会においては、神の愛が魂の内に常住の原理でないとき、人間の本性が何をなし得、何をなすのかが明らかにされている。今どんなことが起ころうとも、私たちは少しも驚くに及ばない。いかなる戦慄すべき成り行きにも驚くには及ばない。神の律法をその不浄な足で踏みにじる者たちは、イエスを侮辱し、裏切った人々と同じ霊を持っている。彼らは良心の呵責もなく、自分たちの父である悪魔のわざを行うだろう。彼らは、裏切り者ユダの唇から出た問いを口にするだろう。「私があなたがたにイエス・キリストを引き渡すなら、何をくれますか？」今なお、キリストはその聖徒たちにおいて裏切られている。Review and Herald、1900年1月30日。